

へども、その用所大に同じからず。○中しわきは財ををしむ、始末は財を節にす、節はふしといふ字にして、竹に節ある如く、よき程々にて止まる事あり、しわきは多く財を貯へんとなり、

〔老人雑話〕下信長は天性吝嗇の人也、相撲取の三番打したるに、焼栗一つ褒美に與ふる様の人也、後に大名共を多く斃し、家を亡すは、我子共又は近習の出頭人に知行與へん爲なり、

〔窓の須佐美追加〕上洞家の僧隱遁して芝邊に住けり、年老て疾に伏しかば、甥なる士常に來たりていたはりけり、や、重りければ、予が方に招き入て看病せんと云へど、きかざりけり、一同に云やう、小き餅を二百ほしきと云ければ、その如くして與へけるに、思ふ事有間、汝とく歸れとて、内より戸をさし固めけり、明朝往て戸を敲けれど、答ざりし故を、し放ちて入りて見れば、かの餅に金一ツ、もみ込、さて四十八ばかり喰し、が、そこにて死したりと見へて、倒居たり、此金を跡に残さん事の口おしくて、悉餅にうめて腹中に入おかんと思ひけるにこそ、かゝる執心深き者も有ける事にこそ、

〔狂歌現在奇人譚〕三編 下一秋亭落霞の傳

落霞がちかきほとりに、とめるあき人あり、此人つねにものをしみする癖ありて、いかばかりのことありとも、人にも、ものなどおくることなし、をりにふれてものおくるときは、さゝやかなる紙に、いとくつたなき畫など、みづからかきて、落霞にうたか、せて、これをもて人におくりて、よろづのことのむくいにあてつ、あるとき落霞、友だちどものかたらひてありしに、かのをのこつねのごとく、みづからかきたる畫ひとひらもてきたりて、これに賛してたまはれとこふ、これをうち見るに、張良九里山に簫をふきて、かたきをはかりしところをぞかきたりける、目ごろものをしみする人のもてきたりしなれば、落霞心には、そまざれども、もとめらるゝに、さりがたくて、まの竹にふえのねたて、武者によぶ木のはをちらす峯のこがらし、とよみかきて、あたへけ